

【三等賞】—海外の大学生



「孤独な日本人」

マリユータ・アレクサンドラ

(ロシア。リヤザン国立大学・女・二十二歳)

「日本人は働きすぎだ」とよく言われるが、日本人がよく働く理由の一つに、給料によって人の地位が決まるということが考えられる。それで、日本人は「試験でいい点数を取らなければならない」、「いい大学に入らなければならない」、「いい会社で働かなければならない」など、子供の頃から多くのプレッシャーをかけられる。その時から、日本人と外の世界との隔離は始まっている。

日本人は他の国の人と比べ、勉強や仕事をして過ごす時間が長い。その結果、家族や友達と過ごす時間が少なくなり、だんだん距離ができてしまう。そして、近年、日本の社会では「孤独な人」が増えてきている。彼らが最も大きく社会から隔離されてしまうのは、大切な試験に失敗したり、仕事をクビになったりした時だ。本当はそうではないのに、社会から、そして家族からも見捨てられたような気になって、他人と顔を合わせられなくなる。そして、最終的に自分の部屋から出られない「引きこもり」になってしまうのだ。その時、最も大きな問題は、家族が何もしないことだ。見て見ぬふりをして子どもの部屋に食事を持って行くのは、問題の解決方法を探すことより簡単だからだろう。

また、日本には「甘え」という概念がある。「甘え」とは、両親をはじめ、周りの人に依存したいという気持ちのことだ。私の国にはそのような概念がない。ロシア人はできるだけ早く独立した大人になることが大切だと考えているからだ。それに対し、日本人の親は子どもに甘い。大学生の子供の学費を払ってあげることが普通だし、子供が一人暮らしの場合、アパートの家賃や生活費まで渡すこともある。また、同居している子供には、食事を作ってあげたり、部屋を掃除してあげたり、服を洗ってアイロンをかけてあげたりもする。両親のこのような態度も、ちよつとの失敗で社会から逃げ出し、家にこもる子供を増やす原因だと考える。

そのような子供を減らすために、「両親は子供との接し方を変えなければならない。周囲の目を気にして「いい子供」になるようにプレッシャーをかけるのではなく、子供の意思を尊重し、自分で将来を選択させることが大切だ。そして、両親だけでなく、社会も子供との接し方を変えていかなければならない。社会から逃げ出してしまいう人が増えている今、できないことを責めるのではなく、できることを見つけられる機会を与えるべきではないだろうか。



日本人の「冷たさ」

張 滢穎

(中国。蘇州大学・女・二十歳)

私は一年間、日本の明治大学へ交換留学したことがある。小さい頃から日本のアニメとドラマが好きだったから、ずっと日本に憧れていた。しかし、日本で一年暮らしたら、私は日本に対する考えが大きく変わった。より客観的になった。「日本人は冷たい」ということだ。

「日本人は、マナーはいいが、冷たい」と感じる外国人が少なくない。

しかし、日本のお年寄りの人たちは、若者より優しいし、それほど冷たくないと感じられる。私は留学していた間、いろいろな所を旅行した。一人で大きな重いスーツケースを持っていた時、手伝ってくれた人は全部、お年寄りだった。若者から声を掛けられたことがない。いつもお年寄りだけが手伝ってくれたから、日本の若者は冷たいと、感じるかもしれない。

また、日本人は「ちょっと恥ずかしがり屋」だと言えるだろう。恥ずかしがり屋で、性格が奔放ではないから、冷たいと思われるのかもしれない。しかし、街を歩いている時、日本人はあまり話さないようだ。新宿のような大きい駅では、ぶつかって人を倒すぐらいの速さで歩いている日本人が多かった。

そして、この「冷たさ」は外国人に対することだけではない。

日本の職場環境は厳しい、と言われていている。仕事のストレスが多く、過労死や自殺などの問題も多い。最近、東大卒の若い女性社員が、仕事の過労と上司にひどいことを言われて自殺したというニュースがあった。自殺した女性は、日本の社会の「冷たさ」に我慢できなかったのではないだろうか。彼女はツイッターに、「一日二十時間も会社にいると、もはや何のために生きてるのかわからなくなった」ということを書いたそうだ。まさに、仕事の巨大なストレスが彼女を自殺に追い込んだのだろう。上司のパワハラも一つの原因かもしれない。

日本人は性格が内向的で、恥ずかしがり屋で、外国人に冷たいと思われがちだ。職場でも、日本人同士の間でも、冷淡な人間関係が決して少なくない。「距離感」を重視する日本人は、人に対して、もう少し「無防備」になってみたらどうだろうか。また、「外人」という観念を捨てて、日本人本来の「温かく、優しい一面」を見せてほしい。



「日本語」を諦めなくて、良かった！

オリン・チャンポン

(カンボジア。プノンペン大学・女・二十四歳)

私が通っていた田舎の小学校は、日本の岡山県の団体によって建設された学校です。そこで、日本のことをたくさん知りました。いつか、その日本の方々に日本語でお礼を言いたいと思って、日本語の勉強を始めました。

しかし、三か月後、教えて下さっていた先生が突然辞めて、日本語を学ぶ環境がなくなってしまうましたが、私は日本語の勉強を絶対、諦めたくない、と思い、都会にある大学の日本語学科に進学することにしました。ある日、先輩に、「日本語は国際言語ではないから、世界中の人々と交流するのは難しい。外国語を使って仕事をしたかったら、日本語はあまり将来性がない」と言われました。それを聞いて、日本語をそのまま勉強し続けてもいいのか、悩みました。卒業後の就職に不安を感じたため、私の日本語を学びたいという気持ちも揺らぎ始めました。しかし、日本語の勉強を諦めないことにしました。そして、今、日本語を勉強し続けてよかったと思っています。

一つ目の理由は、カンボジア人が日本の製品に憧れていることが分かったからです。カンボジア人は、日本の製品は質が良かったため、電気製品やバイクなどを買う時はいつもジャポンの製品を探します。カンボジアで日本語を使って仕事をする人はまだ多くないですが、カンボジア人の日本製品に対する信頼性から考えると、いつか日本語がきっと必要になるだろうと思っています。

二つ目は、高校生の時に一度日本を訪問し、絶対にここで勉強したいと思ったからです。やっと念願がなって、二〇一五年九月から一年間、交換留学生として東京・昭和女子大学に留学しました。この留学を通して、日本の文化や日本の美しさに実際に触れ、「日本人が行動する前に準備しておくこと」や「周りの人への気配りなど」を、学びました。さらに、日本人をはじめ、他の国の留学生と友達になり、日本語を用いて、コミュニケーションをとることの楽しさを学びました。あの時、日本語を諦めなくて本当によかったと思います。

日本語は国際言語ではないかもしれませんが、日本語で国際交流をすることはできると思いますが、グローバル化に伴い、言語は、今後、コミュニケーション手段とますます重要になります。

「第二の故郷」である日本の「文化と言語」を広げる活動に貢献していきたいと考えています。



「匠の精神」を求めたい！

薄 鋒

(中国。大連外国語大学・男・二十一歳)

テレビ番組を見てみると、「爆買い」という言葉をよく耳にします。特に二〇一五年の春節の休みに、中国人の観光客が日本を訪れて、化粧品から便座まで様々な商品を買いました。わたしの母もその一人です。目薬や炊飯器などいろいろ買ってきました。知り合いから「どうして、こんなに日本の商品にこだわるの？」と聞くと、母は「日本製品の品質や性能が信頼できるから、大好き」と答えました。

私もそう思います。日本の商品については、誰もが「信頼出来る」、「サービスがいい」というようなイメージがあります。なぜ、日本という小さい国の商品が、全世界に高く評価されるのだろうか。今、ようやくわかりました。それは日本人の「匠の精神」のためだということでしょう。

いろいろ勉強したところによると、「匠の精神」とは、自らの仕事に専念し、お客様に良い製品やサービスを提供することであるだけでなく、最も大切なことは、「社会のためになる限り貢献して、自分の生きがいも感じられる精神」ということでした。

「匠の精神」は、製造業に限らず各業界に浸透しています。

例えば、大学の日本人教師から見うけられます。家族と離れ、中国語もままならないのに、海外で一人つらい生活を送っています。しかし、学生の成績と能力を高めるために、一生懸命私たちを指導してくださっています。学生がなかなか理解できない時は、自分の休み時間さえも惜しまず、何度も何度も繰り返し、教えてくださっています。

ある日、私は「先生、どうしてそこまで頑張るのですか。努力しなくても給料はもらえるのに。」と尋ねたことがあります。先生は「お金のためだけではなく、仕事を心から楽しんでいのです。学生たちはわたしにとって作品のようなものです。そのため、学生たちが優秀な人材になることは私にとって最高の報酬です！」と答えました。私は、今でも先生の話に大きな感動を受け、自分なりの「匠の精神」を求めようと決めました。そして、身の回りの友人にも「匠の精神」を伝えたいと思います。

たとえ、「爆買い」ブームが終わったとしても、質のいいサービスや製品を提供する日本の「匠の精神」は、今でも全世界に大きな影響を与えていると思います。



「四つの日本」に感動！

ヤスミーン・ザカリーヤ・ムハンマド

(エジプト。カイロ大学・女・二十二歳)

二年前に、交換留学生として、一年間、東京外国語大学で勉強した。その時いくつかのカルチャショックを体験したが、豊かな自然に恵まれている日本に感動した。暖冬と暑夏しかないと言われるエジプトから来た私は、こんなにはつきりと分かれている季節の違いを初めて体感した。

一つ目は秋だ。日本人の友達ともみじを見に近くの山へ行った。目の前で広がっていた紅、黄色などが混ざった木々の葉の景色は画家のカラーパレットのように見えた。個人的には、秋が一番好き。晴れた空に、たまに吹く涼しい風、完璧にいい天気、夜は月見ができるという爽やかな一日は最高だ。

次は冬になる。やっと雪を見る夢が叶った。生まれて初めての雪だった。北海道と秋田などにも行ったたり、雪合戦と暴風雪といった単語も習ったり、ゴロゴロ転がりながらスキーもやってみたりという新鮮なことばかりの冬を過ごした。冬特有のクリスマス・イルミネーションも凄い力を持っている。どんな普通の町並みでも、おとぎ話に出てくるような輝いた素敵なお場所にしてくれる。

そして春が来た。桜の季節だ。しかし、桜が咲いていたのは木の上だけじゃなかった。春は日本のどこを見ても、桜の花びらやら桜色のものが見える。例えば、コンビニやカフェなどの限定商品の味から、女性のネイルまでだ。桜を見飽きた人のためにも、桜以外に様々な花が咲いていた。友達と花見を楽しむ絶好の季節だ。

最後の四つ目は夏だ。エジプト人だから日本の夏だって簡単に耐えられるかと思ったら、完全に負けた。日本人の友達はエジプトと日本の夏の違いを教えてくれた。エジプトの暑さはこちらからとしているけど、日本は蒸し暑い。九〇%を超える湿度は思ったよりきつかった。そのことのせいにして、私が好きな海へ逃げざるを得なかった。人ごみの中で、空でキラキラしている光と祭りの独特な音は外国人の私にも楽しい経験だった。

まとめると、たった一年という短い間で、それぞれの季節ならではの体験や景色を楽しむことができた。全然違う「四つの日本」は、まるで「四つの国」を訪ねたみたいだった。

「日本」の素晴らしさを味わうためには、一つの季節さえ逃してはいけないと思う。



「四国・八十八ヶ所巡り」

ジュンケン・ロー

(アメリカ。プリンストン大学・男・二十一歳)

私は大学で物理学を専攻していますが、日本語に興味を持って、趣味で勉強しています。そして、タイで生まれたので、仏教のルーツを学びたかった。「二つの興味」を実現するために、日本へ行きたいと思っていました。

去年、「Princeton Club of Japan」主催によるプログラムに参加し、二回目の「日本」を体験しました。プログラムが終わってから自由時間があつたので、四国に行って「八十八ヶ所巡り」をすることにしました。一ヶ月の間、四国を歩いて回りました。一人で歩きましたが、「お遍路さんは弘法大師様と同行して歩いて回ると言われています」ので、「二人で歩いて回った」ことになると思います。

香川県の弥谷寺の近くにある「俳句茶屋」でお茶をいただいたこと、徳島県で私がお腹が空いて倒れそうな時にあるおばあさんにパンをいただいたこと、などなど、たくさん素敵な方々との思い出は忘れられません。なまっているおじいちゃんとおばあちゃんが多いので、日本語の日常会話なら問題がないはずの私には聞き取れないことが多かったです。私は、おばあさん達によく「子供扱い」されました。普段、「子供扱い」という言葉は否定的なニュアンスがありますが、四国のおばあちゃんたちにとっては、いい意味です。四国のおばあちゃんたちはあまりにも優しく、いただいた四国のお菓子はあまりにも美味しかった。私はもちろん、「大人になりたい」という気持ちがあるが、四国に住んだら「子供に戻っても構わない」という気持ちになりました。

ところで、日本に行ったことのないアメリカ人は、「日本はどんな国だと思いますか」という質問に、「毎日お寿司を食べる国!」「ハイテクでもとても綺麗な国!」「侍が忍者と戦う国!」などと答えます。私も初めはそう思っていました。しかし三年前に、友達に宮崎駿のアニメを紹介してもらって、「日本はお寿司の国だけではなく、トトロが昔から住んでいる国だ!」と思いました。さらに、日本への発見はどんどん広がりました。

最初の訪日は二年前の夏です。石川県で「Princeton in Ishikawa」という日本語プログラムに参加し、温泉への愛を発見しました。富士山の山頂で日の出を見たり、友達と京都の伏見稲荷にも行きました。優しかったホストファミリーとは今でも手紙や年賀状のやり取りをしています。

いろいろ経験すればするほど、愛するようになってきたのが、『日本』という国、です。

今度、日本に行った時、何を発見するだろうか?とても楽しみだ。

今は、「『日本』という国」と、ずっと一緒にいたい、と思っています。



見習いたい「日本の平和憲法」

イ・ジュヒョン

(韓国。ハンバット大学・男・二十一歳)

二〇一一年三月の東日本大震災の時、被災した日本人たちは慌てずに避難し、みんなが「秩序」を守って行動しました。そして、私はこれまで三回、いずれも、六日間ぐらい日本を旅行しました。道に迷った時、店で買い物した時など、いろいろな体験をして、「日本は秩序を守る国」、「他人に配慮する優しい人々が住んでいる国」だと思いました。

日本は、本当に平和な国です。なぜなら、日本は、韓国のように事実上「戦争中」でもないし、徴兵制度もないからです。私は軍隊で働いたことがあります。北朝鮮との悪い関係のため「戦争」の恐ろしさを肌で感じました。その恐ろしさや不安は二度と感じたくありません。

高校時代、東北アジア史の授業で先生が「日本国憲法は平和憲法です。大切ですから、しっかりと勉強してください」と言いました。日本国憲法は世界唯一の平和憲法です。何よりも日本は憲法で戦争の破棄が規定されていますので、日本国憲法の平和主義を見習いたいと考えます。

日本と韓国は同じ民主主義の国で、憲法の内容はほとんど同じです。

しかし、少し違う点があります。一つ目は、日本は内閣制度、韓国は大統領制度である点です。二つ目は、一九四六年に公布された日本国憲法は九条に「戦争の破棄」が規定されているため、平和憲法と呼ばれています。しかし、一九四八年に発表された韓国憲法は戦争の破棄は規定されていません。

最近、日本では、北朝鮮と中国の動きの影響を受けて、日本国憲法を改正しようとする動きがありますが、私は日本国憲法を改定しないでほしいと思います。

なぜなら、日本は自衛隊と在日米軍がありますし、世界的にみると「軍事力」はけっこう強い方です。何よりも戦争の恐ろしさを実感した私は、日本は、韓国のように戦争状況にならないようにしてほしいと思います。日本の「集団的自衛権」行使も心配です。同盟国が攻撃された時、その同盟国と一緒に反撃できる権利ですから、戦争に参加することができることを意味します。「他人に配慮する優しい人々が住んでいる日本」が、戦争でたくさんの人々が死んだり、家族や大切な物が失われることがないことを祈ります。

私は、今の日本の平和憲法を守ってほしいと願っています。



「衣」のような「繊細な国」

ニコール・フェツラリオ

(イタリア。カ・フォスカリ大学大学院・女・二十二歳)

「日本とはどんな国か」と聞かれたら、すぐに「日本文学」を思い浮かべる。なぜなら、「日本」に興味を持つようになった理由が「文学」だからである。

特に、「衣」の比喻について書きたいと思う。書きたいことは、単に着るものとしての「衣」だけでなく、「衣」が、比喻として、古代及び近現代の日本文学の中でどのような使われているか、についてである。「衣」が人間の感情を表す比喻として使われていると言われている。「衣」は、「日本文学」の中で非常に大切な役割を果たしていると思う。

私が「日本文学の中の衣の役割」というテーマに関心をもったのは、『和泉式部日記』に引用された一つの和歌を読んだ時だ。もとは『古今和歌六帖』に書かれた、次の和歌である。

「伊勢の海女の 塩焼き衣 馴れてこそ 人の恋しき ことも知らるれ」

この比喻は私を驚かせた。筆者は「塩焼き衣に着馴れ、愛着を感じている海女」と、「恋人を愛している人」を重ね合わせたのである。

よく言われるように、こうした比喻はわれわれの世界観と考え方を構築している。たしかに、イタリアの文学やことわざなどには、「日本の文学」のような比喻が存在しないことに気がついた。イタリア語では、愛情は「衣」ではなく、蝶々や、雷、香水、お酒などで表現される。

これに対して、日本文化では、「衣」は人間関係と密接に結びついていると思う。作品によって、「衣」が比喻するものは違うが、いずれの場合も連れ合いへの愛情や自然への愛、寂しさ、懐かしさ、感動などの様々な気持ちを効果的に表現している。例えば、樋口一葉の『たけくらべ』では、二人の若者は言葉で自分の気持ちを伝えられないため、布の切れ端を通してそれを表現する。最初に紅の絹ハンカチ、その後、紅葉の形の友仙ちりめんの切れ端、最後に水仙の造花を交換し合う。熱情を表す紅色に対して、最後の白は熱情の終わり若者の別れの象徴になるのだ。

これらの比喻の本当の意味が理解できたのは、私が去年、日本に留学した時だった。着物の帯を結ぶように、私も日本で一生忘れられない友達と絆を結んだ。また、自分の性格、アイデンティティ、季節などに合った着物と浴衣を着ることによって、日本の文化に直接触れることができた。「日本」は、繊細で、間接的に気持ちを表現する「衣のような国」だと心の底から感じる。



好きになれない「集団行動」

ルーツ・マリア・ハゼス・ファヤス
(コスタリカ。コスタリカ大学・女・二十四歳)

日本は「集団行動を大切にする国」だと思います。でも、どうして日本人はグループになつて群れたがるのでしょうか。どうして自分の意見をはっきり言わないのでしょうか。日本のことは大好きですが、このことに関しては好きにはなれません。

私は日本の京都外国語大学に一月だけ留学したことがあります。そのとき不思議に思ったことがあります。休みの日や授業後など、いつも同じメンバーのグループで行動しているのです。コスタリカでも仲の良い友達グループはあります。しかし、日本はコスタリカに比べ、閉鎖的で排他的だと感じました。

私は哲学を勉強していますが、この日本とコスタリカの友達グループの違いに興味を持ち、日本人とコスタリカ人にアンケートを行いました。学校で友達グループを作る理由として、両国の違う点は、「日本人」は、自分と似た意見を持つ者と同じ時間を共有するためにグループを作るといことです。「コスタリカ人」は、皆と同じ時間を共有することによって、自分とは違う意見や新しい知見を得るためにグループを作るといことです。そのため、日本人の友達グループは、年齢や趣味、思想が似通った構成になります。逆にコスタリカでは、幅広い年齢層で各々の思想もばらばらです。

私が日本で友達グループに属して、良くないと思ったことは三つあります。一つ目は、いつも同じグループだと新しいことに触れる機会が少なくなり、自分の世界が小さくなるということ。二つ目は自分一人の時間が少なくなること。

そして、三つ目に、自分の意見を持たなくなってしまうということです。日本の友達グループには、友達といってもヒエラルキー（階層）が存在しています。グループの中で自分の意見をはっきり言う者と、自分の意見を持たない者やあまり意見を言わない者です。日本の社会では「和」を乱すことは、良いこととは思われていないので、友達グループでも反対意見を言うことは難しいことなのでしょう。

しかし、私は自分の意見を持たないこと、それを言わないことは、自分自身にとって良くないことだと思います。もしリーダーがいなくて、自分の意見を持っていないとどうなるでしょう。いざ、自分の意見を持つと思うても、急には難しいです。グループの中で皆が意見を持ち発言することは、「和」を乱すことではなく、新しい価値観を共有する新たな学びだと思えます。

【三等賞】—海外の大学生

アニメは日本文化の「小さい窓」

ジョン・ハイロ・テズ・モンテネグロ

(コロンビア。カウカ大学・男・二十五歳)



高校生の頃、私は学校から帰って、「documentales de Japon」（日本についてのドキュメンタリー）というテレビ番組を見ました。それは、日本語を勉強する前でした。その番組では日本の日常生活を見ることができました。日本の日常生活は、簡単でも、面白かったです。そして、目を引かれたのは、日本の神秘主義からです。日本にはいろいろな建物が多くて、西洋人が注目する現代の文化と伝統が一緒に存在するエキゾチックな国だからです。

その時、日本について浅いですが、いろいろな知識を持つことができました。本やテレビのおかげで、美しい紙で作った江戸時代の城、折り紙、芸者、着物、が分かるようになりました。歌舞伎と能の演奏を見ていなくても、演劇者の外見を区別できるようになりました。

日本語を勉強することにした二〇〇八年に、日本文化について、少しわかるようになりました。アニメを見始めました。

アニメは日本の文化や宇宙観の「小さい窓」で、普通の西洋人でも、アニメのため、日本文化を知っています。日本に興味のある世代はアニメを見て成長しました。私にとっては、デジタルモンスター、ポケモン、遊戯王、犬夜叉、カードキャプターサクラです。「スタジオジブリ」の作ったストーリーで、日本神話を知りました。

アニメは日本文化の普及手段ですが、同時に「誤解」の起源になってしまったと思います。なぜかという、アニメをよく見ている人は、今の日本人の日本魂とどのように関係するか、を調べないで、その話を鵜呑みにしてしまっているからです。

それでは、「日本」はどんな国ですか？「日本」を特徴付けるのは日本人です。西洋人にとっては、日本人は、躰が良かったり、丁寧だったり、綺麗だったり、責任をとること、などが特徴です。

性格の良い日本国民は外国人を魅了しています。その魅了のおかげで、外国人は遠い日本の言語を勉強する興味を持っています。私は日本へ行けるかどうかわかりませんが、それでも日本語を勉強することにしました。日本語は、どんな時も諦めなくなるほど難しい言語だと思います。母国語のスペイン語と比べたら、文法は違いますし、書き方は「漢字、ひらがな、カタカナ」の3つがあって、それぞれの使い方も難しいです。

それでも、諦めません。

きっと、いつか日本人と話せるようになります。特に、可愛い女のひと。

様々なことを学んだ「素晴らしい国」

レビュー・ブレニク

(ルーマニア。ブカレスト大学・男・二十二歳)



私は一年間、秋田県の国際教養大学へ留学し、様々なことを学ぶことができました。日本は「素晴らしい国」です。

一つは職場でのまじめさです。日本人はどんな仕事を与えられてもまじめに働きます。一番驚いたのはガソリンスタンドでの光景です。社員は毎回、車が出るたびにお辞儀をします。運転者が見ていないにも関わらず、お辞儀をする姿から、お客さまを尊敬していることが分かります。サービスマンで、この姿勢はとても大切なことだと思います。

問題が起こった時や相手に対する接し方に感心しました。どこの国でも、いろいろなことでトラブルや問題があります。悪いサービスマンを受けると、お客さんは怒って騒ぎになることもあります。ところが、日本で見たのは、確実にルールを守りながら、お客さんと一緒に問題を解決しようとする姿勢があります。

また、交通機関の時刻表は正確で、確実に目的地に時間通り着きます。ですから、全国を旅行する計画を立てることもできます。駅で見るいろいろなサインも分かりやすいと思います。関西から北海道まで旅をした時、道順を質問せずに旅することができました。

日本人はどこでも並ぶ傾向があります。新幹線やバスに乗る時、シュークリーム屋などでも、人はいつも並んで自分の順番を待ちます。混雑時でも問題なくスラスラと物事は進みます。レストランでは、いつも長い行列ができていましたが、待っている間に、ショーケースを見て何を注文するか選んでいました。

宿泊する場所は、たくさん選択肢がありますが、私は、カプセルホテルが一番安く便利でした。一人で旅行をした時、安全で接客態度もよく、格安で泊まることができ助かりました。

日本では、カフェテリアやファーストフードのレストランなど、食事をするところはどこでも清潔に保たれています。次のお客さんのために、すぐに、元のきれいなテーブルに戻します。学校でも生徒が掃除当番を決めて学校内を綺麗にします。このようなことを自分の生活に取り入れるのが大切だと思います。

しかし、日本では若者の数が減って、高齢化社会という大きな問題を抱えています。田舎では学校、病院、ガソリンスタンドが少なくなり、生活しづらいところもあり、また観光客も集まりません。

このような問題を解決することができれば、日本はもっといい国になります。



憧れ、恐怖、そして「貴重な国」

ヤクブ・ヴェンツル

(チエコ。パラツキー大学・男・二十五歳)

「日本」は私にとってどんな国なのか。今の答えと一年前の答えと十年前の答えは、それぞれ違うことに気付きました。

十年前の答えから始めよう。当時は高校に通っていて、十五歳の私は、人生はなんか苦しくて悲しいことではないかと思っていました。どこかに逃げたいという気持ちになって、ちよūdその時には「日本」に憧れ始めました。苦しい時は日本語の学習に没頭して、日本語の言葉に優しく慰めてもらいました。当時は「日本」が逃げられる領域だったのです。

時間が流れていて、高校での四年間はあっという間に経ちました。高校を卒業した私は、言語が大好きだし、日本語が長い間私の心を慰めてくれたし、「どうして『日本語』選ばないのか」、という考えが私の頭に湧いてきて、日本語を大学の専門として選びました。

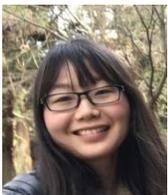
その時までには、日本に憧れていても、実際に行ったことはありませんでした。でも大学の学習の一環として、日本での留学は可能となりました。私は何年間も頑張つて、留学はようやく決まりました。二〇一六年三月から半年間、東京の学習院女子大学へ留学することが決まりました。(修士課程は男性の入学が可能です)。

私は勿論嬉しかったです。しかし、不安もありました。私が想像している「日本」と「実際の日本」はどの程度違うだろうか、という疑問が生まれました。出発の日が近づけば近づくほど、疑問は、不安になり、段々恐怖になっていきました。失望するのではないか、という恐怖でした。ちよūd一年前のことです。

しかし、「恐怖」は結局杞憂でした。日本での留学は、私の今までの人生の中で一番素晴らしい時期でした。十年前、逃げられる領域として日本を選んでよかったです。絶対に良い決断でした。

本題に戻りましょう。作文のテーマは「日本はどんな国だと思いますか」という質問です。今の私にとって、日本は非常に「貴重な国」です。日本に関する思い出は、私の人生を豊かにしてくれます。日本のことを考えると、思い出が一つ一つ浮かんできます。神楽坂の阿波踊り。展望台からの東京の夕暮れ。横浜のネオン。蟬の鳴き声。苦しい時、そのことを思い出すと、苦しみが半減します。

大切な「人と人の距離」



魏 厚静

(中国。西南交通大学大学院・女・二十五歳)

日本人のコミュニケーションは、互いに一定の「距離」を保って、挨拶や敬語などで、秩序ある人間関係を築いている。互いの絆を保ちながら、相手を遠ざけたり、近寄せたりするようだ。

昨年六月、広島県立広島大学へ短期交換留学に行った時、迎えてくれた先生はこう言ってくれた。「うちの学生はあまり留学生とは喋らない。相手にしたくないという気持ちからではなくて、ただシャイだからです。皆さんは是非、先に声をかけてあげてくださいね」。先生が言った通りだ、と私は最初の一週間で感じた。授業の時、一緒に座ったとしても、用事がないと絶対先に口を開かない。また、同じ授業を受けたばかりなのに、廊下で出会っても、無表情に擦れ違う。中国では、少なくとも互いに軽く頷いて、挨拶するだろう。「よそよそしいね」と思った。「こつちから先に話しかけると嫌われるかな」と心配になって、ついに挨拶も口に出せなかった。

「なぜ？」という私の謎を、留学生の先輩と先生が解いてくれた。

日本人は、人との距離を見積もりながら、人と付き合い、人間関係の「和」を保つらしい。相手の反応を見て、意思を理解してこそ、礼儀正しく付き合いができる、と考えているのだ。そこまで親しくなければ、度を超えた行動を取らない。日本人はコミュニケーションをする時、受動的で、自分の行動を他人に頼る傾向が強い。他人が先に付き合いしてくれないと、こつちはずっと待っていて、互いに沈黙に落ちてしまう。外国人が、日本人は付き合いにくく、親しみに欠けていると感じるのは、そういう文化による、人と人との「距離」に対する認識の差のためだろう。

日本人は、あまり親しくない人には、矛盾や衝突を避けようとして、距離を置いて、周りの人間関係を維持している。しかし、対面の接触が消極的で、受動的である日本人だが、手紙・ハガキなどを書く習慣があり、頻度も中国よりだいぶ高い。出産祝いや結婚祝いなどのハガキはデパートでも売っている。新年には年賀はがきを出す。「付き合い」を大切にして、めでたい時は、相手への祝福の気持ちを積極的に伝えようとする。

日本に留学して、人と人の「距離」が人間関係を築く上で大切であること、そして、それを正しく理解することが、異文化コミュニケーションにとっても重要であることが分かった。

【三等賞】—海外の大学生

「和歌」のある大好きな「日本」



王 宏斌

(中国。北京第二外国语学院・男・二十歳)

日本と言えば、アニメやアイドルや化粧品やら、いろいろな現代ファッションは、いま中国で人気を呼んでいる。しかし、私の好みからすると、日本の古典文学には格別な魅力がある。それは、「和歌」です。日本民族の誇りの芸術として、世界文学ファンに深く愛されている。

「和歌」は日本文化の中でも、「最もきらびやかな真珠」だと思う。歴史上、中国文化の影響を受けて、「和歌」は、中国の詩歌と似ているところが多いが、日本の特別な自然環境の影響もあり、「物のあわれ」の美学精神が働いている。中国人の私にも、「和歌」は独自の味わいがあり、未永く衰えない芸術だと信じている。

日本は海に抱かれて、山や川が多い島国だ。大きい山、大きい川ではないが、大昔の人々はずっとそこに住んでいる。山、川に特別な感情が生まれて、言語の発展につれて、その感情と人の感情が組み合わせられて表現されるのが、美しくて細やかな「和歌」だ。

例えば、「田子の浦にうち出でて見れば 白妙の富士の高嶺に 雪は降りつつ」

という『百人一首』の、「歌聖」と言われる山部赤人の「和歌」を読むと、「純粹な自然の魅力」が長い絵画のように、ゆったり浮かんくる。「田子浦の海岸を経て、遠くに見える富士山の頂上の雪、それはまるで美人の肌のように真っ白で、静粛に眠れる少女のような富士山」と歌っているのだろう。人々の胸を打つ和歌だ。

もちろん、景色だけで、そんな「みやびな和歌」を作ることはできない。もう一つ必要なものは、「物のあわれ」という美学精神だ。日本は自然災害が頻発する結果、寂しい感情の美しさを追求する「和歌」が多い。その感情は、一瞬の美を推奨して、中国から伝わった仏教に影響されて深く脳裏に根ざした物悲しい美しさとなって表現される。

現代の人々は新鮮なものを求めて、昔の賢人が書いた書物は軽視されがちだ。

しかし、芸術的価値の高い日本古典文学形式の一つである「和歌」は、日本だけでなく、世界中の人々にとって、学習したり、味わったりする価値のある文学だ。

「和歌のある日本」は私の大好きな国だ。



「言葉の力」を教えてくれた『日本』

李丹

(中国。創価大学大学院・女・四十一歳)

日本語と出会ってから、二十年経った。去年、桜が満開の頃、留学生として再び日本の土を踏んだ。当時の若者はもう若者でなくなる今の私は、目を閉じて、この一年間の研究生生活を振り返ってみると、共に過ごしてくれた日本の若者たちからいただいた言葉は、心を深く温めてくれた。日本語の「繊細の美」は日本の文化や社会の変化と深く絡み合っているということを、再認識することができた。

朝一番、特に疲れていなくても、「お疲れ〜」と元気な声をかけてくれる。心が温かく感じられる瞬間。私も「お疲れ様〜」と楽しく返す。

放課後、「一緒に映画とか見に行かない？」と誘われることがある。たった一つのことでも、「とか」が使われる。自分の意志を相手に押し付けられないように、何か一種の軽い気持ちから選択権を与えてくれてるように感じる。一緒に食事した時、「このケーキ、美味しい？」と聞いてみたら、「美味しいかも。」という返事が返ってきた。友達の連帯感を確かめたり強めたりするために、断定しないで、自分の意見をぼかして、衝突のリスクを軽減しているように感じられる。

自分の意図を伝達する場合に、思いやりを込め、相手との良好な関係を築くことに配慮して、「ヨコ」の人間関係を重視する日本語の配慮表現は、すでに若者の間で流行しつつ、徐々に定着してきている。しかし、外国の日本語学習者にとって、言語現象の背後に深く潜んだ日本文化の特質をよく理解しなければ、コミュニケーションの摩擦や衝突を招きかねない。従って、日本文化の特質をよく理解すれば、対人コミュニケーションも円滑に行うことができるし、心も響き合うことができるはずだ。

『デジタル版・日本語教材『日本』という国』を読んだ。その「六章・三節」に、「日本人の人間関係は、遠慮・敬遠からだんだん親密な間柄へ進むのが自然だ」という意味深い文が書かれている。読んで、日本語の独特な「繊細の美」に気付いた。相手の立場に立ち、相手の気持ちになつて考え、自分自身の品格も保つ若者言葉は、まさに時代の流れに合わせ、平和な世界に自然に定着していく。

人々との一瞬の出会いを大切にし、共感の輪を広げていくということも、日本語から学んだ。世界中の若者たちは、言葉の力で文化や習慣の違いを乗り越え、心をつなぎ、世界をつなぎ、そして未来をつなぐ金の橋を架けてほしいと願ってやまない。

『日本』、ありがとう。



思いやりの「重ね」文化

鄭 敬珍

(韓国。法政大学大学院・女・四十歳)

来日してもう五年になる。日本に留学し、生活しながら母国・韓国とはつきり違う日本特有の生活文化に日々気づかされている。それこそ、日本・日本人を理解するために知っておくべき日本の「魅力」と言えるかもしれない。

日本・日本人の魅力を一言で説明するのは困難だが、私は「重ねる」ことにあると考えている。何においても「重ねる」ことで、その本質や中身をむき出しにせず、より美しくみせるのである。

例えば、日本で買い物をする時、丁寧に包装してもらい、手提げまでもう一枚もらえる場合がある。日本における包装という「重ね」行為は、単なる飾りではない。中身をいかに美しく、気持ちよく相手に伝えるかだけでなく、その中身の有する価値を知ってもらおうとする真心の込められた行為である。用途に合わせて選ぶことのできるお祝儀袋も日本特有の「重ね」文化の象徴といえる。古くからいえば、着物の重ね襟や重ね着などもあり、「重ね」から日本人の美意識がうかがえる。

日常生活でも、このような「重ね」文化は容易に発見することができる。例えば、日本では挨拶の際に何度も互いにお辞儀をし、挨拶の言葉を交わしている風景を見かける。また、普段の会話の際にも、日本人は一から十までのすべてのことを言わない傾向がある。それは、相手に「察して」もらう余地の部分を残したまま、「重ねて」言葉を交わしていくためである。この時の「重ね」行為は、自分の考えや理解をそのまま通すことなく、相手の理解を得ようとする配慮を基に成り立つのである。

自分の意見を結論まできちんと言えるのが大人という韓国の文化で育った私は、日本人のこのような「重ね」会話を非常に不思議に思えた時期もあった。しかし、日本で生活しながら「重ねる」という行為は、相手に対する「思いやり」から出発する概念であることが分かった。

日本語の表現をみても主語は「私」ではなく、「相手」になる場合が多く、私は相手から「くしていただく」立場に置かれる。これは相手と言葉を重ねていくための一つの工夫であり、このような言葉の重ねによって成り立つ会話は、相手に対する「思いやり」と「感謝」の気持ちを忘れないための工夫であるかもしれない。

これからも日本の「重ね」文化の魅力が世界に発信されることを期待する。

笑顔で接する日本人

ドウニヨン・ゴッドフリッド・チヨトンノボ

(ベナン。京都大学大学院・男・二十七歳)



日本は常に世界を驚かせてきました。ベナンにいた時、日本語は特殊な言語で、日本は珍しい国、と思っていました。日本について知っていたすべてが真実であることが判りました。「日本人は一日に二十四時間働いている」という噂を聞いていたのですが、日本に来てみて、それは本当でした。京都の百万遍の周りに、一ヶ月で建設を終えた建物ができましたが、みんなががんばったからでしょう。私の国・ベナンでは、そんなにがんばる力を見ることがないです。信じられないことでした。

また、日本人は仕事ばかりで、楽しみがないと言われていますが、国民の祝日も多く、ゴールデンウィークなどは、仕事を休んで、旅行したりしています。京都には祇園祭、時代祭、葵祭などがあります。日本人はお祭りを楽しんでいきます。お寺や神社が沢山あります。私は銀閣寺が好きです。

日本人は、生活のための仕事と楽しみを組み合わせることで、いつも笑顔で他人と接しているのに感心しました。日本人は、いつも相手の気持ちを悪くしないようにしています。

日本では、自動販売機ほどの町にもあり、またロボットが想像以上に優れていて、銀行やスーパーでは、お客様に話をして、仕事するのにびっくりさせられた。ベナンでは考えられません。

日本は経済的に三番目の国であり、先端技術はどの国よりも強いです。子供の頃から、日本のアニメを見ていました。ワンピース、デスノート、ドラゴンボール、ナルトなど。私がこれまで見てきた一番好きなアニメは「ナルト」です。なぜ、「ナルト」が好きなのか。ある村の火影（ほかげ）になるのを夢見る野心的な少年の物語です。悪魔の狐の皮に覆われているため、村人から嫌われていましたが、忍耐強く頑張りながら、少年は夢を果たし、村全体を驚かせました。彼の忍道の話は、私に日本への情熱を持たせました。このアニメに感激して日本語を学び、日本に行きたい、と思いました。

日本は「四つの季節」があり、春には桜の世界が現れ、花見に行きます。夏は暑くて少し過ぎにくいです。秋は、黄色の葉と紅葉の美しい風景があります。寒い冬は雪が綺麗です。日本は火山、津波や地震などの多い国ですが、予知や災害予防の研究が進んでいます。食べ物も、鮨、ラーメン、牛丼、豚肉、焼き鳥やなど、おいしいものがたくさんあります。

これからの日本で生活する「ユニークな冒険」が楽しみです。



残してほしい「農村の原風景」

ディン・テイ・トウ・ホアイ

(ベトナム。佐賀大学大学院・女・二十六歳)

私は、ベトナムの大学で、第二外国語の選択科目で日本語を選びました。日本語学習期間は三年半くらいでしたが、日本のラジオを聴いたりする習慣を付け、その後、石川県の国際交流センターで二カ月半、日本語や日本文化を学ぶ機会に恵まれました。そして、去年、佐賀大学の農業研究科に入学しました。「有機栽培に関する研究」をしています。

実際に農場で研修したり、山奥の村まで行って、日本の農家の人々と話したりして、他の留学生と違う体験だと思えますが、人々と自然が調和しながら共存している日本の里山の景色が大好きです。小川のせせらぎ、田畑、きれいな空と夕焼け、鎮守の森、よき隣人、そして井戸水など、現代の都会より純粋な日本の原風景が見えてきました。自然に囲まれた優しい風景は、「暇の中のふる里」の風景です。それは目で見るより、心で感じるものです。アジア人は、郷愁を抱かれません。

ただ、社会発展とともに、そういう景色がだんだん忘れられる傾向があつて、それは時代の流れというもので仕方がないと思っていました。しかし、九州地方で農業調査を実施して、少し考えが変わってきました。日本の農家のおじいさん、おばあさんは、『日本は便利さと引き換えに、昔からある大切なものを失っている』とよく話していました。ベトナム人の私は、「日本はとても便利な国じゃないですか」と最初は納得できませんでした。が、農業に関わる研究をする中で、ようやく理解することができました。一例を挙げると、「食」と「農」が離れているという問題です。

現在の日本社会では、「食べ物」が、「食料」になり、「食品」に形を変えていく中で、その原点にある「農」を意識することが難しくなっています。本来、「食べ物」は「農業」で作られるものです。一年を通して、スーパーに行けばなんでも安定的に食品を購入することができると便利さの半面、本来「食べ物」の持っている「旬」が失われているのではないのでしょうか。

一方で、農家から届く四季折々の「食べ物」は、農家の人々の優しさを感じることができず。

農家のおじいさん、おばあさんが言っていたように、私たちは、便利さを追求する中で大切なものを失っているのかもしれない。日本の農村は、忘れがちな大切な価値を思い出させてくれる存在です。日本は、今後も、農村風景を、「旬」の大切さを、農家の人の思いを、残してほしいと思います。



持ち帰りたい「思いやり」

張 淑婷

(中国。関西大学大学院。女・二十五歳)

私が初めて日本の成田空港に着いてからあつという間に、もう四年間が過ぎた。日本に
来た最初の何ヶ月、私の日本に対する認識に大きな変化が起こったことを今でもよく覚え
ている。

多くの留学生は私と同じく、日本にきてから次のような現象に気付いたことだろう。

日本では、道にゴミ箱はなく、ゴミは家に持ち帰って自分で処理しなければならぬも
のである。エスカレーターでは、一つの段に一人だけ立ち、右側は急ぐ人のために譲るも
のである(関西の場合は逆で、左側に譲るものだ)。そして、知り合いでなくても挨拶は交
わすものである。また、電車などの公共の場所では通話は禁止である。そのほか、どんな
に怪しい服装をしていても、皆から変な視線を受けないものである。もちろん、このよう
な例を挙げたらキリがない。このような日本の出来事には、実は共通点があるのである。
それは、「相手に面倒をかけないように」ということなのである。このような考えを理解す
ることは、日本人と上手く付き合うコツだと思われる。また、これが理解できれば、日本
にきてから疑問に思ってきたいろいろなことが不思議ではなくなるだろう。

だから、私が日本から持ち帰りたいものは「相手に対する思いやりの気持ち」である。
中国では、民族極端主義者がメディアで日中の歴史をすさまじく捻じ曲げて報道し、中国
人は、日本というのを恐れてしまう。しかし、一度日本で生活をしている日本人たちに近づ
くと、日本人の温かさ、謙虚さ、平和思考などの印象を受ける。

しかし残念ながら、中国人にこのような美德は見ることができない。せめて、日本人の
ように他人の立場を考えるとすることができるようになればと、思わずにはいられない。
なぜなら、「思いやり」は日本人の国民性として世間に認められ、その心は称賛されている。

これから、多くの留学生は日本から母国に帰る時に、私のように日本から持ち帰りたい
ものをカバンに入れて運ぶことを望む。私たちにとって一生有益であり、人々への影響は
計り知れないと思われるだろう。

素晴らしい「笑顔文化」

吳 朗静

(中国。首都大学東京大学院・女・三十歳)



文化は、人間が特定の自然、社会環境に適応して、形成されてきたもので、また、日常生活の中で人との接し方に体现されています。「文化に貴賤なし」ですが、多文化の知恵を吸収して、自文化を発展させることも大事だと思います。普通、自分の慣れっこ文化環境から離れたことがなかったら、自分の母文化と比較して、反省することはなかなか難しいと思います。

もし、私は日本に留学に來なかつたら、多分、日本の文化の角度から改めて中国に存在している問題を反省することもできなかつたでしょう。そして、この異文化に対する疑惑、抵抗、思考、バランスという苦しい過程を経験した後、日本の文化の知恵が私の力になれなかつたでしょう。たとえば、「笑顔の力」は、日本人が私に教えてくれた「どんな問題にも解決できる不思議な魔法」です。

中日両国は一衣帯水の隔たりがあるだけで、文化では全く違う国だということです。中国は極めて不安定な歴史を経験してきており、戦争や紛争が多かつた国で、近年の経済の高速発展により、多くの人たちが、それを利己心、わがまま、自己中心主義といったものをもたらすとみているが、人に対する「笑顔と思いやり」をだんだん忘れていく傾向が自分自身も厳しく感じています。

日本の町並みの静かさと清潔さ、世界一と称される日本人のマナーに感嘆させられました。特に、毎日、日本人の親切で温かい笑顔に励まされました。しかし、最初、私は同じように元気な笑顔で返事をするできませんでした。毎日アルバイトで疲れて、よく店長に叱られたり、生活や勉強も色々な悩みがあったり、どうして笑えるのと、愚痴ばかりこぼしていました。しかし、周りの人の笑顔が毎日、私の心を温めてくれました。私も笑って見ようかと思って、最初は、無理に笑顔を作ったりしました。気分が落ち込んだり、辛いと感じる時、無理にでも表情筋を動かして笑顔になることで、自然と気持ちが軽くなりました。同時に、まわりの人も私を好きになってくれました。

最初は笑顔をつくっていたとしても、後は、楽しい出来事が多くなつてきて、本当に心から楽しいと思えるようになりました。仕事や、友人、恋愛関係でも、実際にプラスのことが増えてきました。笑顔には笑顔が集まって、不思議と「幸せ」の輪ができました。

笑顔で色んな事を乗り切れる日本人。日本の「笑顔文化」が素晴らしい。



日本で学んだ「こだわり」

徐 佩

(中国。高知大学・女・二十一歳)

昨年九月、私は交換留学生として高知に来了。みんな親切で授業も充実していた。寂しいのでは？と心配する両親に「心配しないで」と伝えたが、心の中には、手を傷だらけにしながら働く両親の姿がいつもあった。そんな時、先輩がファミリーレストランのアルバイトの紹介をしてくれた。時間も授業前の朝だけである。私は喜び勇んでその店に行った。

ところが、女性の店長さんは、私が携帯電話を持っていないと知ると、いきなり、厳しい言葉で、「雇えない」と言った。日本人は、こんなに冷たいのかと愕然とした。朝の勤務なので連絡が取れないと支障が出るという理由だった。しかし、パソコンでメールのやり取りができる、ともう一度頼んだら、試用期間を設けて渋々引き受けてくれた。

そして始まった朝六時半からのアルバイトは想像以上に大変だった。いつも叱られた。例えば、店の掃除の時、ドアの掃除は、ガラスとドアノブを拭く布を違うものにしなればならない。モップで床を拭くときは、左から右に拭くこと、などだ。「日本人はどうしてそんな小さいことにこだわるのか」、正直そう思った。しかし、店長は、その理由を私に丁寧に説明してくれた。「人の手に触れる場所は、清潔でなければならぬ」、「店の右側に商品があるから、最初のモップは水だらけなので、もし右から始めたら、その瞬間、水が飛び散る。だから、埃と水が飛び散らないように左から右へ拭く」ということだった。

「こだわり」は、中国語では「拘泥」で、よくない意味だが、私は、次第に、日本人の「こだわり」を理解できるようになった。「こだわり」があるからこそ、周りに妥協しないで、真実を追求できる。

店長の厳しさの中にある優しさを感じるようになった時、店長が代わった。男性の店長は、私の掃除を褒めてくれ、バイトは順調だった。ところが、ある日、私は大きな失敗をした。モーニング終了の十分位前、モーニングメニューにない料理の注文を私は勝手に判断し引き受けた。店長に、「ルールは守らなければならない。一つ例外を作ると、それはルールではなくなる」と注意された。

日本人の自分自身への厳しい「こだわり」が、日本の技術や文化、人々の生活を支えているのだ、と実感できた。先日、見た「雛祭りの人形」は、小さな飾りも本物のように繊細に作られていた。

日本はいい意味で「こだわりの国」だと思う。私も真実に向かって「こだわって」生きていきたい。

生きる力をくれた「勤勉なお婆ちゃん」

サロル・ボロルマー

(モンゴル。東京外国語大学大学院・女・三十歳)



東の空に太陽が昇って、都会に忙しい一日が始まる。どこを見ても、あつちこつちへ急いで歩いたり走ったりしている人々の姿が見える。ここは日本の東京都である。

私は日本に留学してちょうど一年間経っている。初めて海外にきて、生活をしている私に不思議なこと、驚くことがたくさんあった。例えば、電車に乗り、自動販売機で飲み物を買ひ、高層ビルを見て首が痛くなり、びっくりしたことがたくさんあった。

でも、私は一つだけ、本当に感謝し、喜び、感動し、忘れられない思い出ができた。

一人の「お婆ちゃん」だ。

日本に私費で勉強している私のような留学生にとって、バイトをして、生活費を稼ぐしかない。発展途上国から来た私は飛躍的発展した国である日本に留学するのは、運かもしれないけれども、逆に、大きなリスクがあるのも事実だ。いつも、両親にお金を送ってもらうのは無理なので、バイトを探して、やっと見つかった。それは、清掃の仕事だ。最初は、仕事をして、その給料をもらうのは本当にうれしかった。

しかし、仕事を始めてがっかりした。若いなのにトイレの掃除するのが恥ずかしかった。毎朝四時に起き、バイトへ行き、終わったらすぐ学校へ行く。本当に苦しかった。このバイトを辞めたい気持ちで毎日あった。『嫌いなのに、どうして今まで働いているの』って、思われるかもしれない。理由は一つしかない。それは一緒に働いているお婆ちゃんだ。毎朝、化粧して笑顔で仕事をする七十五歳のお婆ちゃんは、仕事場まで自転車まで走って来る。走ったり、歩いたりしながら仕事をするのは誰より元気である。私は、このお婆ちゃんを見ると幸せになる。元気になる。本当に頑張る気持ちがわいてくる。

お婆ちゃんは、いろんな話をしてくれた。『私はいつ死ぬかわからない。朝、目を開けると、嬉しくて神様に感謝する。毎日満足な生活を過ごしたいと思う。家で何もしていないのは嫌い。私は人間だから、他の人々と同じように動きたい。人の一生は短いものである。幸せな生活はないけれども、幸せな一日がある。だから、今生きていることを喜んで、満足な気持ちで生きるのが一番大事なこと』。

私は、この話を聞いて自分が恥ずかしくなった。私は、このお婆ちゃんと一緒に働いてから、人の生き方について考えるようになり、そして、仕事に対して、やりたい気持ちがわいてきて、一生懸命がんばるようになった。お婆ちゃんの話からたくさん教訓を汲み取ることができた。

私は、お婆ちゃんのおかげで、生きる力が出てきた。

私は、一人の「日本人のお婆ちゃん」の勤勉な性格、優しい気持ちを忘れずに、頑張っていきたい。

「新」から「信」の国へ！



ジョン・ハンモ

(韓国。京都大学大学院・男・二十九歳)

日本に留学していると、日本語に「新」の入った単語が目につく。新聞、新鮮、新商品、新幹線、新入生、新郎新婦、新宿、新大阪、大化改新、明治維新など、数えきれないほど多い。その中でも、毎年の春が来る度に、私の目を引く「新」がある。「新卒」である。

この単語は、日本と同じく漢字圏である韓国出身である私にとっても、日本に来て初めて知った単語である。日本人の友人曰く、大学卒業を予定している者を予め採用するのを「新卒採用」制度という。確かに「新」好きの日本に相応しい採用制度なのかもしれないが、果たして「新卒」で、いい人材が選び抜けるのかと疑わしい気がする。

近年、企業活動においてグローバル化が進み、各企業は全世界を舞台に活動している。日本においても、日本企業の海外進出は、二〇〇一年から二〇一二年まで二・二倍増加した約二万二千社に至っている、という数字がある。このような時代に必要なのは、国際的な人材である。国際的な人材とは、他国の「人と文化」に対する深い理解を持っている人である。こうした国際的な人材は、桃太郎のように突然生まれてくるのではない。少なくとも、一度母国から離れ、ある程度の時間を他国で過ごしながら、様々な経験を積み重ねていくという、熟成の時間が必要なのである。

日本企業の海外進出は毎年増え、国際的な人材へのニーズは高まっているというのに、日本の場合、国際的な人材養成があまり進んでいない。海外で活躍できる日本人の若者の数が増えてない。二〇〇四年に八万人に達した日本人の留学生数は、二〇一一年六万弱まで縮んだ。二〇一五年に八万四千人になったが、特に増えているわけではない。不思議に思いその理由を調べると、「留学すると(留年する可能性が高くなるため)就職に不利だから」(文部科学省、二〇一四)という事情があるらしい。

私は「新」好きの日本社会が若者たちを、「待つことができない」のが問題ではなかるうかと考えている。「待つ」は「信じること」と等しい。日本社会は、日本人の若者が安心して海外で様々な経験ができるように、「待つ」という社会的な状況を構築する必要がある。長期的な観点から、これは日本がさらなる発展を成し遂げるための土台になるに違いない。

今までの日本が「新」の国だったとすれば、これからは「信」の国になってほしい。

素晴らしい「規則」の国



何 旭

(中国。早稲田大学大学院・男・二十二歳)

日本に来る前、日本社会は規則が厳しく、人々の生活の至る所に規則が存在し、みんなロボットのように生きているという話をよく耳にした。日本の学校や職場で制服やスーツを着ることはその代表例の一つだと思う。例えば、学生たちは、学校では制服だけではなく、靴や靴下まで校則で定められているものを着なければならぬことが多い。「規則正しい国民性」、これは昔から中国人が抱いている日本人のイメージだ。

一九八〇年代から中国人は「日本式の規則」の素晴らしさに憧れていたが、近年では、日本の厳しい規則に対して、批判も多くなってきた。これは日本の経済状況と関わっているのかもしれない。日本社会は、複雑なルールのせいで、活力がなく、杓子定規な人間が集中しているところだと捉えられている中国人が少なくないのだ。確かに、規則が厳しくなると、人間としての自主性が抑えられる可能性は否めない。しかし、規則のメリットとしての「安定と効率」を無視できないと思う。だから、日本の規則は素晴らしいものだ、と私は思う。

社会のルールを守ることは、普段の生活の保障ではないだろうか。人類の歴史からみると、人間は、規則がなければ、社会が混乱するはずだ。日本では、駅の乗車口やスーパーでレジの前、どんな場合でも、人が多くなると、必ず行列ができる。私はこういうところに感心している。「ちゃんと並ばなければならぬ」というルールは、人々の生活を整えているのではないだろうか。争わず、静かに自分の番を待つという行動は、社会に安定と効率を与えらると思う。つまり、定められたルールや秩序がなければ、諸々の事故が生じやすく、仕事の効率はもちろんのこと、社会の安定も脅かされるのではないかと考えられる。

自分の専門が法学なので、日本の法律についても多少の知識がある訳だが、現在の日本の法律は百余年の努力の結果である。明治維新以降、西洋式法律を導入した日本は、無数の判例や法律改正を重ね、一步一步、現在の法律を作り出した。法律は規則の一である。そして、世の中に存在する規則にはそれなりの存在意義があると私は考える。「日本式の規則」には日本人の文化と知識の蓄積が介在している。日本に留学している私は今後も引き続き日本式規則を勉強したいと考えている。

私の人生に「大きな役割」



コマロフ・ミハイル

(ロシア。創価大学・男・二十二歳)

日本という国が私の人生の前に現れたのは、モスクワ大学付属アジア・アフリカ諸国大学に入学する前だった。中・高等学校の時、外国史に関する教科書には「どうして西洋の歴史が大部分を占めるのだろう」とよく思った。日本史に関する情報をもっと増加してほしい。日本史はロシア人がもっと大切にする必要があるのではないかと思った。

高校生の時、私は極真会空手道のクラブに通いはじめた。空手は、日本の伝統的な武道の一つである。私は練習の時に初めて「日本語」の言葉を聴いて、畳に立つ相手がお互いにする「礼」なども見た。空手は日本に対する私の興味をすごく高めた。空手が私自身の勇気を育て上げて、気概を増強したと思う。そして、日常生活の中で、私の中で「不転の心」を作り出してくれたと思う。

モスクワ大学に入学して以来、皆もそうだが、日本の歴史や、文化、経済、政治などを一杯勉強している。日本についての研究は、きちんと私の視野を広げたという結果が与えられて、歴史的な出来事や歴史に残った人物に対する私の見る目も変わってきたと思う。

日本での二年間の交換留学は日本に対する興味をもっと高めてきた。来日する前に、何年間も、毎日のように多くのことを勉強してきた。来日してからは、ロシアで得た知識を初めて実際に体験できたことが何よりも嬉しかった。

教科書で読んだ名所を自分の目で見る時や、日常生活で日本語を使う時には自分の意識が変わる気がする。日本に住めば住むほど、自分が日本の研究に傾注する希望が私の中でどんどん強くなっていった。同時に日本に関する知識が足りないということも感じたし、日本の様々な分野をもっと研究していこうと思うようになった。

日本は、やはり私の人生に「大きな役割」を果たしているとはつきり言える。「日本なし」の私の人生は私の人生じゃない気がする。将来も日本の研究を続けて、自分の専攻とのかかわりのある仕事を見つけないと思う。



素晴らしい「四季の変化」

支 元辰

(台湾、関西大学大学院・女・二十八歳)

私にとって、「日本」は、「四季の変化」の素晴らしい国、だと思っています。

私は大学から日本語の勉強を始め、学校の日本文学課程を通じて、日本の現代と伝統をあわせ持つている文化に触れ、川端康成さんの「古都」を読みました。京都を舞台にした物語で、美しい四季の移り変わりを文章を通して感じる事ができ、主人公達の繊細な会話を読んでいて落ち着いていく、静かな雰囲気のある味わい深い作品です。

台湾は、一年中暖かくて晴れた気候ですので、私はこのような季節の変化を、実際に体験したくて、日本に関するにとっても興味を持つようになりました。

大学三年生の夏休みには、東京へ短期留学に行きました。ちょうど海のシーズンで、祭りと花火大会がありました。台湾では、夏だけ営業している海の家や周辺の海が見えるカフェなどは少ないので、友達と海水浴場に行つて、ドラマみたいな開放的な空間で皆とのんびりと一日を過ごしたのは、私にとつて初めての夏の体験でした。そして、私の住んでいた近所で盆踊りがありました。住民の高校生が和太鼓を披露し、昔ながらの和太鼓のリズムに合わせ、輪になって「盆踊り」を踊つて、夜風の中、地域の人々が家族のように揃つて楽しんでいたのが、とても印象に残っています。日本人とお互いに助け合いながら生活することで日本人の礼儀正しき、気品ある姿を目の当たりにしたため、日本事情について更に知りたい気持ちが強くなりました。

二年前、大学院に進学するために、仕事をやめて日本へ留学にきた時は、秋でした。私にとって、日本の秋といえば、紅葉ではなく、文化祭です。台湾では、このような活動は参加者は多くないです。しかし、日本の大学の文化祭では学生たちがイベントを計画し、自分がやると決めたことを最後まで真剣にします。

学校は小さな社会なので、他人と考え方が違つたら、自分が正しいを思つても、自分の考え通りに進むことは難しいです。日本の大学の文化祭を見て、学生自身がお互いのことを認め合うように努力していることを知り、私は強く応援したいと思うようになりました。

冬の雪、お正月、春の桜、新しい年度、日本の季節は時間がゆっくり過ぎていきます。

『デジタル版・日本語教材『日本』という国』を読みましたが、日本で長年にわたつて受け継がれた年中行事や、いろいろな和食、季節ごとの豊かな生活などを知ることができます。日本人のライフスタイルが、身の周りのことも含めて、どんどん変化して、四季折々の旬を楽しむ生活をしていることは、本当には素晴らしいと思います。



「日本の空の深さ」を体感

エディー・ウー

(ニュージールランド。オークランド・インタナショナル・カレッジ・男・十七歳)

小さい時、井戸の中の「蛙」は、海を知りませんでした。日本が当時住んでいた中国の隣国だということしか認識がありませんでした。小学生になった「蛙」はゆっくり井戸を登り、井戸の外の世界を少しずつ観察できるようになってきました。外の声を聞いて、「蛙」は、日本が「きれいな国」で「日本人が優しい人々である」という印象を持ちました。

小学校五年生の時、「蛙」は初めて日本に行きました。日本および日本人の印象をさらに広げました。日本はきれいなだけではなく、豊かです。五つ星のホテルや美しい景色があり、観光客にとって楽しい場所です。また、東京などの大都市には超高層ビルもあり、金融関係の業務も活発です。

日本人は優しいだけでなく、とても友好的だと感じました。札幌でのスキー旅行中、「蛙」は何度もお尻から倒れました。でも、毎回、近くの日本人のスキーヤーが「蛙」に近づいてきて、「大丈夫？」と言って起き上がるのを手伝ってくれました。彼らの話した内容はよくは分かりませんが、彼らの身振りはぬくもりを伝え、「蛙」の心と体を温かくしてくれました。

小学校六年生になった「蛙」は、家族とニュージーランドに移りました。この国は本当に平和な天国です。けれども、到着から一ヶ月、クライストチャーチに地震があつて、百八十五人の人々が亡くなりました。それから二週間後の二〇一一年三月十一日、日本で東日本大震災が起こりました。マグニチュード9・0の地震が日本の海岸沿いを襲い、とても大きな津波を引き起こしました。一万五千人以上の人々が破壊的な地震と津波で亡くなり、数万人以上の人々が家を失いました。

しかし、この自然災害は日本人の良いところを引き出したことを、テレビで知りました。消防士や警察官が自分の命を犠牲にして、地震の被災者を救ったり、大学生のボランティアが被災者のお世話をしたり、食料や飲料水を配っていました。これらの事を見て、「蛙」は日本と日本人を深く理解する事が出来ました。日本はとても「強い国」で日本人は団結が固い、ことを知りました。

「蛙」には、たくさんの日本人の友達があります。日本語をもっと勉強して、日本の文化イベントに参加して、「日本」と「日本人」の良さをもっと体感したいと思っています。

井戸の中の「蛙」は、外に出て大海をみて、「『日本』という国」の空の深さを知りつつあります。

すばらしい「お握り」の国



ハデイル ファアテヒ アブドアーラア
(エジプト・社会人・女・二十三歳)

「日本」についてのイメージは、アニメ、寿司、漫画、桜、富士山、技術、などが多いと思います。これは「日本の外」から見たイメージだと思います。私はカイロ大学で日本語を学び、一年間の横浜国立大学に留学する機会を得ました。私は実際に「日本の中」から、「日本」を知ることができました。

「日本」には「お握り」というご飯を固く握って味を付けた食べ物があります。ご飯の中に、何が入っているか見えないのです。おいしい魚や肉や野菜が入っていて、周りを海苔で包んでいます。私はお握りが、大好きです。どこでも食べられて、とてもおいしいです。「お握り」と「日本」はすごく似ていると思うので、「日本」は「お握りの国」と言いたいです。日本は世界の東の端にある島からなる小さな国です。そこに一億を超す人々が住んでいます。日本の国は山が多いので、人々はほとんどが平らな土地に、まるで「お握り」のように、固まって住んでいます。

そんな日本で、人々は時間を守り、規則を守り、とても真面目に働いています。たくさんの方が都会に住んでいても、うまく社会がまとまって進んで行きます。留学中、夜遅く帰宅しても怖くないし、とても安全でした。また、日本の技術の進歩は日本人の真面目なところから生まれたのでしょうか。

そんな日本人は私達エジプト、エジプト人にどのようなイメージを持っているのでしょうか。ピラミッド、スフィンクス、砂漠、ナイル川がほとんどでした。エジプトがアフリカ大陸にある事を知っている人は半分ぐらいです。半分の人はヨーロッパ大陸にあると思っています。エジプト人の多くがイスラム教徒である事もあまり知らないようでした。エジプトの有名なコシヤリという料理も知っている人はほとんどいませんでした。日本人には、本当のエジプトを知っている人はあまりいませんでした。

日本は「お握り」のように沢山の物がつまって、すばらしい国です。しかし、海苔でしっかり包まれているので、エジプトや遠くの国の事は、あまり知っていませんでした。

私は、今、JICA（日本の独立行政法人・国際協力機構）のスタッフとして、日本とエジプトの理解を深めるための仕事をしています。日本のすばらしい所をエジプトに伝え、エジプトのすばらしい所を日本に伝える役目を果たしたいと思っています。

おいしい「お握り」を作って、エジプトの人にもそのおいしさを伝えたいと思います。



日本の「優しさ」を象徴する「優先席」

イルヤソワ・ヒマハニム

(アゼルバイジャン。社会人・女・二十三歳)

私は、保健省の会計士として働いています。アゼルバイジャン国立経済大学の時から、日本語と日本について興味があり、勉強しています。

また、日本へ行ったことはありませんが、動画サイトで関連するビデオを観たり、インターネットで、日本の情報を集めて、勉強しています。そして、日本の公共交通機関などにみられる「優先席」に、とても感心します。ほかの国に、「優先席」はありません。

優先席とは、高齢者や妊娠中の女性、身体障害者などの着席を優先させる、通常の席とは区別されている座席です。優先席のほとんどは出入り口付近に設置されていて、多くの人に公共の交通機関をより快適に、より安全に使用してもらおうという配慮からです。私は、現代の日本社会の「優しさ」を象徴するのが「優先席」だと思います。

「優先席」の対象となっている人たちは、他の人に比べると席を確保するのが困難である人たちです。そのような人たちに席をより確保しやすい状況を作るのは、誰もが暮らしやすい社会づくりの一環としてとても大切なことです。

そして、優先席は交通機関の安全を保護するためにも欠かせないものです。足元が不自由な人々にとって、走行中の急停車の際など、立っていると危険を伴う場合があります。他の客には影響のない揺れであっても、それによって怪我などを負う可能性があるからです。さらに、事故を未然に防止することができます。

優先席は必要ないという意見もあるそうです。全ての座席を優先席と同様に扱い、乗客は場所に限らず、いつでも必要な人に席を譲るマナーを身につけるべきだという考え方です。優先席をなくすことで、人々にそうしたマナーの向上を求めることができます。しかし、車中での携帯電話やゲーム機器の使用が増加する中、乗客の周囲へのマナーや配慮は薄くなるばかりです。周りの乗客に席を譲り合う気配りは難しいと思います。実際に、優先席であっても席を譲ろうとしない若者がいるそうです。

個人のマナーやモラルの向上は、簡単ではありません。不確定なマナーやモラルの向上を期待するのは難しいと思います。「優先席」を必要としている人々の安全を犠牲にするべきではないと思います。

「優先席」は、日本人の「優しさ」を世界に証明しました。高齢者や体の不自由な人たちだけでなく、公共の交通機関をより多くの乗客がより快適に安全に使用することができる「優先席」は素晴らしいと思います。

【三等賞】—日本語学校生（日本在住）

日本人の優しい「あいまいさ」



オダヴァル・ゾルザヤ

（モンゴル。ゴレスアカデミー日本文化経済学院・女・二十三歳）

もし、日本人に初めて「今度、家にあそびにきてね」と誘われても、わたしは行きません。なぜなら、日本人が一回目に言うのは本心ではないからです。二回目なら、行ってもいいと思います。このあいまいな言いかたは日本人特有の習慣、あいさつの一つだと思います。

わたしはスーパーでレジのアルバイトをしています。レジの時、お客さんに、「マイバックをおもちでしょうか」とききます。もっていないときは「レジ袋をお出ししましょうか」とききます。お客さんは「いいです。いいよ」などと言います。わたしがモンゴルで勉強した日本語では、「いいです」はすべてOKという意味です。だから、レジ袋を出してしまい、お客さんに「いららないと言ってるでしょ」と怒られたことがあります。日本人の「いい」は「いらぬ」、つまり、NOの意味になることがあると、はじめてしりました。

こんなこともありました。日本人の友達と服を買いに行ったときの事です。わたしは試着をして「これはどうですか」ときくと、彼女は「いいね」といつてくれました。ほかの服をきても「いいですね」といいます。ほんとうにいいのは、どちらですか。どうして日本人はあいまいな表現をするのでしょうか。どうしてはつきりと本心を言わないのでしょうか。

アルバイトを探す時、求人誌をみていくつも電話をかけました。電話のあと、ほとんどの担当者は「それでは、あとから電話をしますね」と言いました。わたしはあとから電話がかかってくるものと、期待してずっと待っていました。電話がかかってきたためしは一度もありません。

一年以上日本に住み、最近ようやく日本人の「あいまいな表現」が理解できるようになってきました。友達が試着したわたしの姿をみて、「その服はあなたに似合わないよ」と、はっきり言われたら、きもちが悪くなったでしょう。アルバイト募集の担当者に「あなたの日本語は下手だから、やとえません」と、はっきり断られたら、傷ついたことでしょう。日本人の「あいまいさ」に最初、外国人はとまどいます。しかし、その「あいまいさ」は、日本人の文化であり、人を傷つけてはいけないという「優しさ」なんだと理解できるようになりました。

最近、わたしは日本人に、何か頼みごとをされて、断りたい時、「ちよつと考えさせてください」と、あいまいにこたえることにしています。これは優しい日本人の心です。